

小学校における箱庭を取り入れた援助活動の在り方

—登校しぶりが見られるA男との面接を通して—

¹星野 政知 ²黒田 浩司 ³山口 豊一

箱庭療法に関する理論と方法について研究を進め、登校しぶりが見られるA男との面接を通して、箱庭を取り入れた援助活動の在り方について体験的にとらえようとした。特に、面接者とクライアントとの関係に視点を当て、箱庭作品、逐語記録、クライアントの変容などの検討を通して、小学校における箱庭を取り入れた援助活動の在り方について考察した。

I はじめに

本研究では、今回、箱庭を取り入れた援助活動に焦点を当てて研究を進めていきたいと考える。その理由としては、次の三点が考えられる。第一に、箱庭による表現活動を取り入れることによって、児童との関係づくりが容易になり、⁴A男とのかかわりの方向性も見い出すことができること。第二に、箱庭は表現が手軽で、興味をもたせるのに十分なものであり、抵抗なく進んで取り組むことができること。第三に、箱庭は、プレイルームや面接室の一角の狭い所でも活動が十分にできることである。

そこで、A男とのかかわりを通して、小学校における箱庭を取り入れた援助活動の在り方を究明していきたいと考えた。そのためには、箱庭療法に関する理論と方法を学び、A男との箱庭を取り入れた面接における箱庭作品や逐語記録、A男の変容などの検討を通して、実践的な研究を積み重ねていく必要があると考える。

II 研究の内容

1 理論的考察

(1) 援助活動とは

『小学校における教育相談の進め方』の中で、「教育相談は、一人一人の児童の発達と教育にかかわる諸問題をめぐって、本人及びその保護者などに必要な心理・教育的援助を行うものであり、それぞれの当事者が問題を柔軟にとらえ直し、その解決に向けて主体的に努力する過程を尊重し、その過程が円滑に生じるように側面から可能な援助をすることを基本としている。」¹⁾述べている。さ

¹ 緒川村立八里小学校

² 茨城大学人文学部

³ 茨城県教育研修センター

⁴ A男のプロフィール、箱庭作品等については、守秘義務のため変えてあります。

らに、同書において、「児童が学校生活において、自分の能力を最大限に発揮して、充実感や成就感を得ることができるような指導・援助を充実することが必要である。」²⁾と述べている。

そこで、援助活動とは、児童に充実感や成就感を毎日の学校生活の中で味わわせながら、児童が自己実現に向かっていく過程を尊重し、その過程が円滑に生じるよう側面から援助する活動ととらえた。そして、この活動においては、個性をもった児童一人一人を、かけがえのない存在として温かく見守り、児童が心の安定を回復していく過程を大切にしていかなければならないと考えた。

(2) 援助活動の中に箱庭を取り入れる長所

河合隼雄は、『箱庭療法入門』の中で、「心理療法においては、クライアントの自我のみに注目せず、治療者の受容的な態度に支えられて、クライアントの心の中に新たに生じてくるものを大切にし、その発展の可能性を生かそうとする。この際、その可能性として生じて来つつあるものを言語化して表現することはなかなか困難である場合が多いが、それを箱庭という一つの視覚に訴える表現方法によって引き出そうとするのである。」³⁾と述べている。人間が、自己を表現する方法には、言葉や文章、表情や動作、絵や箱庭など様々なものがある。その中でも、言語による自己表現が苦手なクライアントにとっては、箱庭による表現は、視覚的にもとらえやすく、面接者と互いに感じ合えるものが多いという長所がある。

(3) 面接者とクライアントとの人間関係

河合は、同書の中で、「箱庭は、治療者と被治療者との人間関係を母胎として生み出された一つの表現として考えている。」⁴⁾と述べている。このことから、箱庭療法においての、面接者とクライアントとの人間関係の大切さがうかがえる。

また、ドラ・M・カルフは、『カルフ箱庭療法』において、「母子一体性」⁵⁾と「自由で保護された空間」⁶⁾の2点を重視している。

① 母子一体性とは

カルフは、『カルフ箱庭療法』の中で、「子供は母親のやさしさの中で、保護されているということを知るようになり、信頼関係が生じてくる。(中略)私は、子供の治療を行う場合には、子供との間に信頼の雰囲気を作り出すということを自分の任務としてきたのである。」⁷⁾と述べ、このような関係を「母子一体性」と呼んでいる。そこで、面接者とクライアントとの間に、「母子一体性」のような信頼関係をつくることが大切であると考えた。

② 自由で保護された空間とは

カルフは、同書の中で、「自由で保護された空間をわれわれの関係の中に作り出す。」⁸⁾と述べている。そこで、面接室の保護された空間と砂箱の空間、さらに面接者によって心理的に守られている空間を、「自由で保護された空間」ととらえた。そして、このような場面を設定することによって、クライアントが自由な雰囲気の中で自己表現をすることができるようになると考えた。

(4) 面接者とクライアントと箱庭作品との関係

箱庭療法における面接者とクライアントと箱庭作品の三者関係を表したものが図1である。クライアントと作品の間には、クライアントの自己表現と箱庭作品で表現された世界という相互作用があると考えた。箱庭作品が出来上がっていく過程においては、この相互作用が頻繁に起こると思われる。

そして、クライアントが、思い描いた通りのものが出来上がらないときでも、置き換えや作り直し、修正が可能であり、その世界に入り込むことができる。

また、目に見える形で表現された世界(箱庭作品)は、面接者に様々な情報を送り、面接者は、それを受け取り、感じ、理解する。そして、箱庭作品を媒介してクライアントと共感できると考えた。

さらに、「母子一体性」という面接者とクライアントとの関係が、箱庭作品を作る原動力になる。そして、面接者とクライアントが、箱庭による体験や気づきを言葉や表情で表すことによって、信頼関係がより深まっていくと考えた。

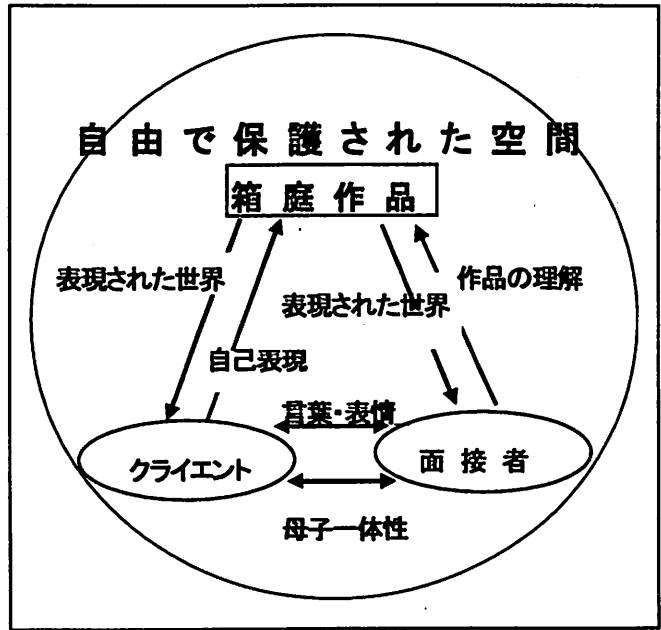


図1 面接者とクライアントと箱庭作品との関係 (岡田, 1984⁹⁾を修正)

(5) 箱庭療法の治療的要因

岡田康伸は『箱庭療法の展開』の中で、箱庭療法の治療的要因¹⁰⁾として、母子一体性や自己表現、カタルシス、転移関係、自己治癒力などを挙げている。箱庭療法は、クライアントが箱庭への表現意欲が起こってきたときに、面接者との「母子一体性」に支えられて、自由な空間の中で、無意識から湧き出てきたものが、砂箱の中の小世界に投影される自己表現による療法であり、これによって自己治癒力が発揮されてくるととらえた。そして、やがてクライアントの変容につながっていくことになるのとらえた。

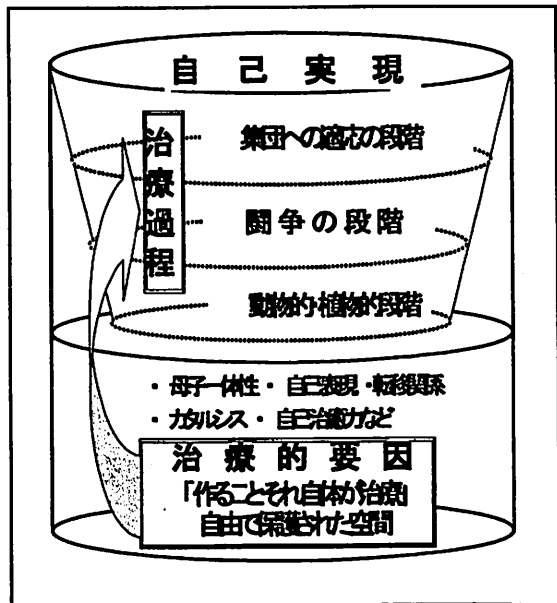


図2 箱庭療法の治療的要因と治療過程

(6) 箱庭療法の治療過程

カルフは、治療過程をE・ノイマンの考えに基づいて、動物的・植物的段階、闘争の段階、集団への適応の段階の3つの段階¹¹⁾が展開されると仮定している。

カルフによれば、動物的・植物的段階とは、無意識内にある本能的なものが活性化された表現段階といえ、この段階では、動物や植物のミニチュア玩具を使って、ジャングルや原始林、奥深い森などの作品となる。闘争の段階では、単なる衝動的な表現にとどまらず、対立、闘争という形で、混沌とした世界に意味のある力と力のぶつかり合いが生じてくる。この段階を経た後、集団への適応の段階として、穏やかな秩序を取り戻した世界が現れ、一回り成長し安定したクライアントの内面が示される。

そこで、このような過程を経て、クライアントが自己実現に向かって変容していくのであるととらえた。図2は、箱庭療法の治療的要因と治療過程をまとめたものである。

(7) 箱庭作品の見方

河合は『箱庭療法入門』の中で、「まず大切なことは、作品をできるだけシリーズで見ることである。」¹²⁾としている。そして、作品の見方の4つの視点を挙げている。これを参考にして、具体的な作品の見方として、次のようにまとめた。

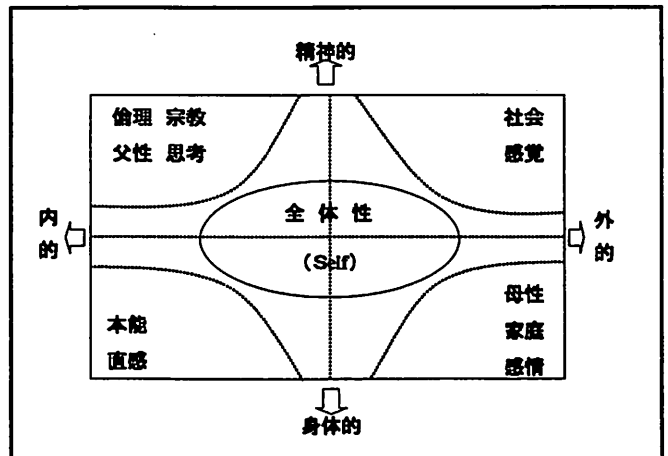


図3 箱庭の空間配置 (秋山 1972)

① 統合性…箱庭作品を見たとき、その全体から受ける印象を感じ取る。

② 空間配置…箱庭作品の構成に関して、その箱のスペースをどのように使ったかを見る。秋山さんと子氏は、臨床経験的な知見から図3の空間配置¹³⁾を考え出している。

③ 主題…箱庭作品にはテーマがあり、どのようなテーマに基づいて作られているかを見る。

④ 象徴的意味…箱庭作品の中に使われる事物の表す意味を見ていく。

(8) 箱庭を取り入れたA男へのかかわり

A男は、言葉や文章による言語表現は苦手であるが、砂遊びや図画工作などは生き生きとして活動する。そこで、砂やミニチュア玩具を使う箱庭を取り入れた援助活動が有効であると考えた。

A男のありのままの気持ちを受け止めることによって、A男が、十分に受容され、支えられてい

ると感得できれば、自由に自己を表現していく過程の中で、変容していくのではないかと考えた。

2 実践を通しての考察

(1) A男のプロフィール

A男は、小学5年生で、昨年から登校をしぶり、遅刻や欠席がたびたび見られた。学校でのA男は、授業中の問い掛けに対して、直感を働かせて瞬時に応える様子も見られるが、興味や関心が長続きしないため注意散漫になったり、文章を読むことやノートをとることを面倒がったりする。また、女子や自分より力の弱い男子に対しては、わがままな行動や乱暴な態度をとることが多い。そこで、A男のありのままの気持ちを受け止めて、まず信頼関係作りをすることが大切であると考え、遊びを通してかかわりをもつようになっている。A男と砂遊びをしてみると、A男の表情からは、生き生きとしている様子を感じられるが、かかわり方によっては、A男の開き始めようとした心を閉じさせてしまうことがある。

そこで、箱庭を取り入れた面接における面接者とA男との関係の在り方に視点を当て、A男の箱庭作品や逐語記録、A男の変容などを検討し、箱庭を取り入れた援助活動の在り方について実践的に考察を進めた。

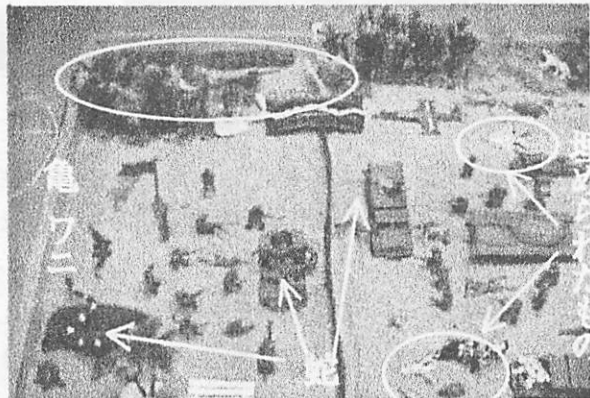
(2) 戦いをテーマとしているA男と指示的な言葉掛けをする面接者（以下、CはA男、Tは星野） 〈具体的な場面〉

第1回面接	
A男の様子	<ul style="list-style-type: none"> ○ 最初は緊張気味であったが、箱庭作品作りに集中して取り組んだ。 ○ 4月初めに見られなかった表情が、箱庭作品作りを通して見られた。 ○ 面接から戻っても、しばらくは興奮気味で授業に集中できなかった様子であった。 ○ 友達に面接の様子を聞かれても「秘密」と答えていた。

〈考察〉

面接者にとって、A男との初めての面接ということもあり、緊張して面接に臨んだ。A男は、面接室に入るとすぐに「なんだこの遊べる所はいい。」と言って、興味深くミニチュアを眺め、面接者の「砂や好きなおもちゃを使って、砂箱の中に何か作ってみて。」という言葉掛けに戸惑うことなく作り始めた。A男は、初めてにもかかわらず、自分の思い描いた世界をて

資料1 第1回面接のA男の箱庭作品
(箱庭作品1「戦い」)



いねいに作っていった。

しかし、面接者自身は、Cの「基地」に対して、A男の欲しいというその気持ちを受け止められずに、Tの「基地はなんかで作れないかな、砂ではどう」と応答してしまったり、出来上がった作品と一緒に見ようと思い、席に座るよう指示をしてしまったりする点が多かった。

今回の箱庭作品の特徴は、最初に左上隅を有刺鉄線で囲んだこと、途中、バイクや飛行機が埋められたこと、橋が架けられたこと、亀やワニが登場したこと、蛇が多数使われたことなどが挙げられた。特に、蛇が多く使われたことから、A男の内的なエネルギーが感じられた。

(3) 戦争と恐竜の世界をテーマとしているA男とA男のつぶやきを聴けない面接者

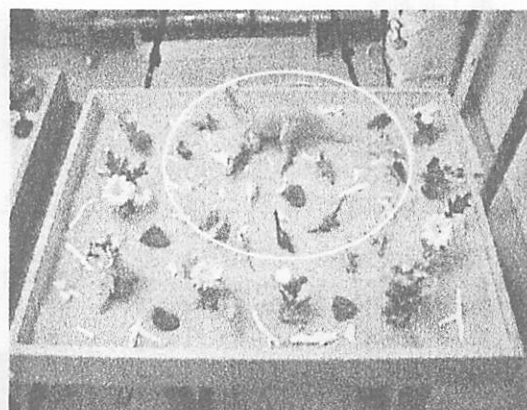
〈具体的な場面〉

第2回面接	
A男の様子	<ul style="list-style-type: none"> ○ 朝から楽しみにしていた様子で面談室に来た。 ○ 面談室に入るとすぐに、準備を始めて箱庭に取り掛かった。 ○ 1つ目が出来上がると、2つ目にも挑戦した。 ○ 他の友達もやりたがっていることを教えてくれた。 ○ 面接の後の授業にも、落ち着いて取り組んでいた。

資料2 第2回面接のA男の箱庭作品

(箱庭作品2-1「戦争」)

(箱庭作品2-2「恐竜の世界」)



〈考察〉

A男は、第1回の面接で箱庭作品作りに大変興味をもち、今回は、あらかじめ作るものを考えてきた様子で、手際よくミニチュア玩具を置いていった。私は、A男が作品を作っている間は、「自由で保護された空間」を心掛けた。A男の声が弾んでいるように感じられ、面接者とA男との関係が、今までよりも親密なものになってきていると感じた。そして、A男は、作品の出来栄に十分満足していた。第1回面接でA男から要求のあった「基地」を私が用意したところ、A男は気に入っ

た様子で1つ目の作品に取り入れた。

今回の面接者の反省点としては、逐語記録に示してあるように、Cの「1つ増えてるような気が。」と何度もつぶやいているA男の言葉を聴けなかった点であった。

箱庭作品1と今回の箱庭作品2-1を比較すると、左上隅の囲いが簡単なものになったこと、橋が架けられたこと、中央にも橋が架かって左右の世界の行き来ができるようになったこと、左右に分かれた兵士が近づいていることなどが特徴として挙げられた。また、作品2-2では、恐竜のミニチュア玩具が使われ、戦いの雰囲気異なったものになっていて、A男の内面の変化が感じ取れた。

このころのA男は、授業に落ち着いて取り組めるようになった。

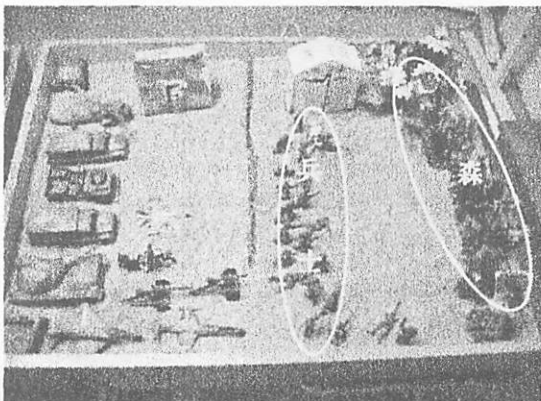
(4) 射撃の練習と蛙と蛇の合戦をテーマとしているA男とA男の気持ちを受け止めつつある面接者

〈具体的な場面〉

第3, 4回面接	
A男の様子	<ul style="list-style-type: none"> ○ 面談室に入って来た時の表情が明るく、心にゆとりのある言葉が語られていた。 ○ 箱庭の写真を手渡したところ、それを友達やB先生に見せたり、家に持ち帰り、母親に箱庭のことを話したりしていた。 ○ 今回も写真が欲しいことやC7のように箱庭作品作りで足りないものを要求するようになった。 ○ 登校をしぶることが、ほとんど見られなくなった。

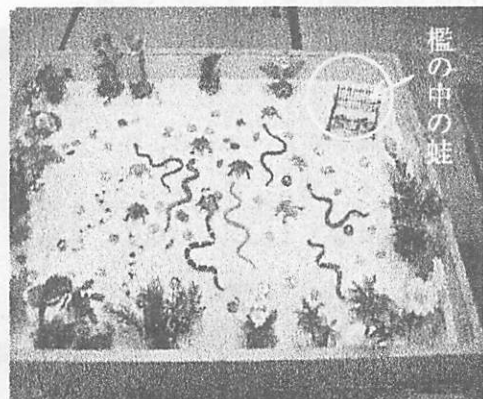
資料3 第3回面接のA男の箱庭作品

(箱庭作品3-2「射撃の練習」)



資料4 第4回面接のA男の箱庭作品

(箱庭作品4-1「蛙と蛇の合戦」)



〈考察〉

第3回面接では、箱庭作品を作っている途中での質問を多くしてしまい、A男の手を止めさせてしまったり、T「どうして砂がかかっているの?」というような言葉掛けをしてしまい、「母子一体性」のような信頼関係にはなっていなかった。第4回の面接では、A男の気持ちに共感し、その気持ちに応えたことによって、親和感が増してきたことを面接者は実感した。

箱庭作品3-2は、中央の兵士が外的方向に向かって射撃の練習をしており、右隅の木々が鬱蒼とした森を思わせる。左右の世界を区切っていた柵は、手前だけ取り除かれている。また、箱庭作品4-1は、箱の隅に木々が置かれ、エネルギーに満ちた蛇と無意識と意識をつなぐ蛙とが向き合っている作品であった。右上隅の檻に閉じこめられた蛙も印象的であった。

このころのA男は、週1回の箱庭作品作りを楽しみに登校し、登校をしぼる様子もほとんど見られなくなっていた。

(5) 無人島をテーマにしているA男と面接者自身の価値観で聴いている面接者

〈具体的な場面〉

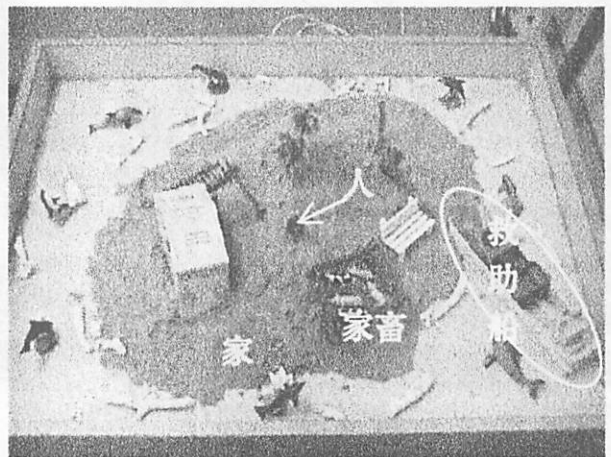
第5回面接	
A男の様子	<ul style="list-style-type: none"> ○ 朝、水泳の帽子のことで、母親と口論し遅れて登校して来た。そのことでやや興奮ざみで、面接前の授業は集中できなかった様子であった。 ○ 箱庭作品作りをしている時のA男には、そのような様子は見られなかった。 ○ 今回も2つの箱庭作品を作り上げ、残りの時間は、トランプ遊びをするほどであった。 ○ 友達に自分から溶け込んでいこうとする様子が見られた。

〈考察〉

第5回の面接では、A男の話を面接者自身の価値観で聴いてしまっている場面が多く、A男が箱庭作品を作り上げていく過程を見守り、共感していくことができなかった。河合が述べているように、「箱庭表現を共に感じ、共に味わっていくような態度で接する。」¹⁴⁾ということは大切であるが、実際の面接場面になるとなかなかできない。

これまでの箱庭作品の中で、特に箱庭作品2-2で見られた変化は、箱庭作品5-2で、無意識と意識が統合され、「無人島」というイメージで現れてきたのでは

資料5 第5回面接のA男の箱庭作品
(箱庭作品5-2「無人島」)



ないかと考えられた。

このころのA男は、友達とのトラブルもなくなり、休み時間には、友達と一緒にトランプ遊びなどをするようになった。

- (6) 2つの島と工事中をテーマとしているA男と箱庭作品作りを見守ることが少しずつできるようになった自分

〈具体的な場面〉

第6回面接	
A男の様子	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前日、かぜのために欠席をし、前日分の学期末テストを行っていた。 ○ 箱庭作品の写真を手渡すと、満足そうな笑顔であった。 ○ 自分の思い描いたイメージ通りに作っていき、手直しはなかった。 ○ 今回も箱庭作品作りとトランプ遊びを行ったが、私がトランプ遊びで勝つと、「負けであげたんだよ。」という言葉も返ってきた。

資料6 第6回面接のA男の箱庭作品

(箱庭作品6-1「2つの島」)



(箱庭作品6-2「工事中」)



〈考察〉

A男は、今回も箱庭作品作りに熱中する姿が見られた。逐語記録に示したように、面接者は、A男が箱庭作品作りに取り組んでいる間は、言葉掛けをしないで見守ることを心掛けた。T「もう1個は、どうしますか。」に対して、A男は明るい声でC「作る。」と応えた。この面接場面がA男にとって、「自由で保護された空間」になっていると感じられた。また、次回の面接日について、T「この次なんだけど。」と話し掛けると、C「21日かな。いいですよ。」と、笑顔で応えてくれ、A男が面接者との面接を楽しみにしていることを感じ取った。

箱庭作品6-1は、中央の世界が、やや混沌としている感じであるが、エネルギーがあり、そこ

で無意識と意識の交流が起こり、この交流が次の作品の統合につながっていると思われた。箱庭作品6-2では、箱庭の奥のところで工事がされていて、A男が、次の段階に向かっている過程であると考えられた。

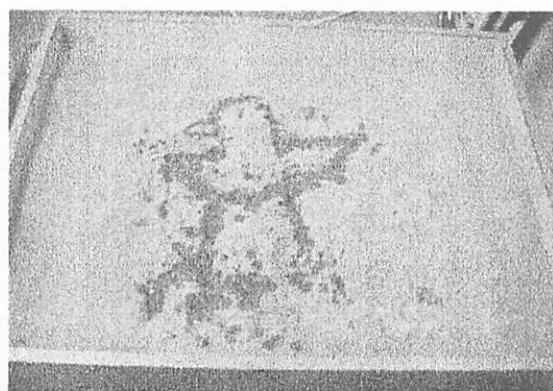
- (7) ナスカの地上絵と火星人の占領をテーマとしているA男とA男と共に作品を味わえるようになりつつある面接者

〈具体的な場面〉

第7, 8回面接	
A男の様子	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校に着くまでの間にも、自分から通知票のことやお父さんの仕事のことなど話してくれた。 ○ 第7回面接の後に、紙粘土の工作を行ったが、そのときA男が作った木や柵、火星人は、第8回面接の箱庭作品の中で使われていた。 ○ 第8回の面接の日は、家族で海水浴に行く予定が入っていたが、約束の時間に家の前に出ていてくれて、明るい表情で応じてくれた。

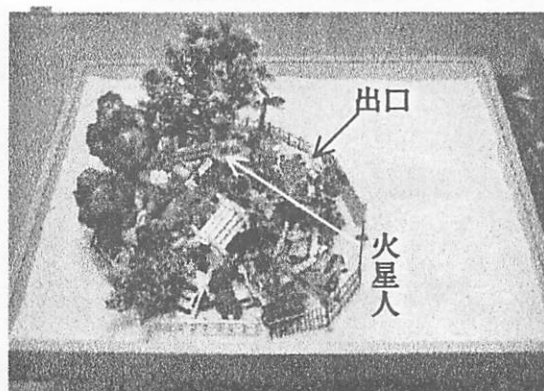
資料7 第7回面接のA男の箱庭作品

(箱庭作品7-2「ナスカの地上絵」)



資料8 第8回面接のA男の箱庭作品

(箱庭作品8「火星人の占領」)



〈考察〉

第7回面接のC「わかるかな。」、「何に見える。」や第8回面接のC「なんだと思う。」などのように、A男は、はっきりした口調で、面接者に問い掛けるようになってきた。A男の親しみのある面接者に対する問い掛けから、A男と面接者の間に「母子一体性」のような共に感じ、共に味わう信頼関係ができてきたと考えられる。

箱庭作品7-2は、ミニチュア玩具を一切使わず、はけに水をつけて水滴を落としながら描いた箱庭作品であった。A男の創造的なエネルギーが箱庭作品作りを通して感じられた。これまでの箱庭作品とは趣きも異なり、神秘的なイメージの箱庭作品であり、A男の心の中で何かが生み出され

ようとしているのではないかと思われた。また、箱庭作品8は、箱庭作品5—2の発展したものと考えられた。A男は、初めに車やベンチなどを重ねていき、家庭から出されたごみをイメージしていたが、火星人を置くことによって、ファンタジーの世界に変わっていった。前回の「工事中」や今回の2つの箱庭作品に至っては、これまでの「闘争の段階」とは違って、穏やかさが箱庭作品に感じられ、「集団への適応の段階」への移行段階ではないかと考えられた。

(8) A男の箱庭作品の変遷と私とA男との関係からのまとめ

第1回面接から第4回面接までの箱庭作品は、「戦い」がテーマになっているが、第2回面接の「恐竜の世界」から回を増すごとに「戦い」の質に変化が見られた。この時期のA男の学校生活での変化は、笑顔が増えたこと、友達とのトラブルが減ってきたこと、作文の分量が増えてきたことなどであった。

これまで混沌としていた世界は、第5回の箱庭作品で統合され、「無人島」になって現れたと考えられた。そして、A男自身の未だに解決できない自分の世界を、第6回の「2つの島」「工事中」に表現しているのではないかと考えた。このころには登校しぶりも解消してきて、授業も最後まで真剣に取り組めたり、国語や算数のノートもきちんと書けたり、友達と仲良く遊んだりすることができるようになった。

また、第7回の「ナスカの地上絵」は、A男の創造力が最大限に発揮されたものであり、治療過程によれば、第8回の箱庭作品で、「集団への適応の段階」に移りつつあるA男が感じられた。

これまで、A男は1回の面接で2つの箱庭作品を作ったり、第1回面接から第8回面接まで箱庭作品を生き生きと作り上げた。箱庭作品作りを通して自己表現をすることにより、A男の自己治療力が発揮され、学校生活に見られた変容に至ったと考えられる。

面接者のかかわり方としては、第1、2回の面接まで、面接に対しての構えがあったと思われる。指示的、評価的な言葉掛けが多く、十分にA男の気持ちを受け止めていなかった。第3回の面接から箱庭作品を通して、A男の世界に入っていき、A男の気持ちも受け止められるようになってきたといえる。時折、私自身の価値観で言葉掛けをしてしまうことはあったが、第7、8回の面接では、箱庭作品が出来上がっていく過程を共に味わい、楽しむということができつつあることが分かった。

IV おわりに

小学校における箱庭を取り入れた児童への援助活動の在り方を究明するために、登校しぶりが見られるA男との面接を通しての研究を進めてきた。その結果、次のようなことが分かった。

1 小学校における箱庭（自作の砂箱、玩具でもよい）を取り入れた援助活動では、児童と面接者との信頼関係が基盤となる。

2 援助活動の中で、「母子一体性」のような信頼関係を培うことによって、クライアントの自己表現がより可能になる。

3 箱庭を取り入れた面接において面接者が、「自由で保護された空間」を心掛けることによって、

クライアントは、自由に自己表現を行い、自己治癒力が発揮されてくる。

4 言語による自己表現が苦手なクライアントにとって、自己を表現する方法として箱庭は有効である。

5 箱庭作品は、継続的、多面的な見方をする必要がある。

最後に、以下の課題を挙げて、これからの研究の指針としたい。

- 箱庭療法についての理論的、実践的な研究を深め、クライアントの自己表現と面接者との関係について明らかにしていきたい。
- 様々な援助活動の在り方について実践的に研究を進めていきたい。

(註)

- 1) 文部省 1991 「小学校における教育相談の進め方」大蔵省印刷局 p. 5
- 2) 同上書, p. 4
- 3) 河合 隼雄 1969 「箱庭療法入門」誠信書房, p. 17
- 4) 同上書, p. 17
- 5) ドラ・M・カルフ, 河合 隼雄監訳 1972 「カルフ箱庭療法」誠信書房 p. 7
- 6) 同上書, p. 10
- 7) 同上書, p. 7-8
- 8) 同上書, p. 10
- 9) 岡田 康伸 1984 「箱庭療法の基礎」誠信書房 p. 19-20
- 10) 岡田 康伸 1993 「箱庭療法の展開」誠信書房 p. 18-36
- 11) ドラ・M・カルフ, 河合 隼雄監訳 1972 「カルフ箱庭療法」誠信書房 p. 17-18
- 12) 河合 隼雄 1969 「箱庭療法入門」誠信書房, p. 31-51
- 13) 秋山さと子 1972 「第16回箱庭療法テキスト」日本総合教育研究会 p. 55
- 14) 河合 隼雄 1969 「箱庭療法入門」誠信書房, p. 31